慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田村秀夫著 イギリス・ユートウピアの原型 : トマス・モアとウィンスタンリ
Sub Title	Hideo Tamura, The prototypes of English utopia : Thomas More and Winstanly
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.11 (1968. 11) ,p.1215(101)- 1220(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19681101-0101
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19681101-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

旧植民本国に対する感情、ナショナリズムなどについては、バウァーは全然考慮していない。アジア人化、アフリカ人化政策の下に、自発的ないし強制されて立ち去ろうとしている行政官、実業家、技術者などが経験豊富なのに比べて、国際機関などから派遣されてくる若い技術援助要員は、貧困諸国のことをよく知らない、とバウァーは言う。

それではバウァーは心理的要因を全然考慮に入れず、経済的効率に徹するかというと、そうでもない。彼は援助無用論よりさらに一歩進んだ援助有害論者なのであるが、その根拠の一つとして、無償の援助は受取国に援助供与国の動機について疑いを抱かせ、感謝するどころか反感を生じさせるという。

バウァーの援助有害論の根拠は、援助が資源の最適配分を妨げること、国内経済政策の失敗、それによる受取諸国の経済の実体をおおいかくすことになるということが第一である。第二は、物質的進歩は、主として、適切な人的資質、態度、社会的制度の開発に依存するものであり、これは外部から与えられるものでなく、自分自身で開発しなければならないものである。人的資質の開発は教育によってもたらされ、教育は援助によって学校をつくることによってもたらされ得ないか、という疑問が生じるかもしれないが、これにもバウァーは否定的である。教育が労せずして得た援助資源を利用することによって急速に拡大されるとするならば、大学卒業者のための雇用は当然存在するはずはない。人生で最善なものは、労苦してはじめて学びとられるものであって、他から与えられるものではない。持続的で、無制限な援助の流れは、受取諸国を「被救済民化」する危険があるという。

このようなバウァーの指摘するところは、たしかに現実に存在する。インド人の学者や医者で、インドで雇用をみつけようとせず、アメリカなどで働いている者はきわめて多い。このような学者や医者はインドでは希少なはずなのに、満足する俸給を提供する雇用機会が少ないのである。明治維新以後、海外へ留学した日本人は、日本に帰ってきて、その習得した新技術を大いに役立てた。今日の低開発国民が、せっかく外国で教育を受けながら、自国に帰りたがらないのは、明治の日本人と比較して、愛国心が欠如しているのかもしれないし、あるいは彼らはあまりにも英語やフランス語が達者なので、先進英語国やフランス語国で簡単に雇用の機会がみつかるという、植民地的事情によるのかもしれない。

アメリカの援助によってナイジェリアに忽然として立派な大学（少なくとも立派な大学の校舎）が出現しても、それがナイジェリアの経済発展に大きく貢献しているとは思われない。自動車の組立工場などを低開発諸国に建設するのは比較的簡単である。関連産業など皆無でも、部品はすべて輸入できるからである。しかし自動車組立工場があり、形式的にはその国のマークをつけた自動車が生産されたからといって、その国が発展したことにはならない。

援助の大きさは受取国の交渉力によっても左右されるが、それよりも供与国の政治的・経済的要因に左右されるところが大きい。このように不安定な援助を、開発計画のなかに初めから予定して組み入れてしまうことには私は反対である。貯蓄は外国からの貯蓄のトランスファーをあてにするよりも、自分で節約して実現しなければならないし、何よりも大切なのは自分で努力するということである。援助が受取諸国を「被救済民化」するということは、つまり乞食根性にするということで、たしかにこのような事実もみられる。イスラムの倫理の下では、貧者は富者に施しの機会を与えることによって富者を天国に行かせるというので、施しに対する感謝の気持は貧者側にないという。

低開発諸国政治の不安定、政府内の腐敗、国民の努力する意志の欠如とか、こういうたぐいのことは低開発国内部で解決すべき問題であって、外部から干渉すべきことではないであろう。こういう点は私はバウァーに賛成である。バウァーの援助有害論は、道楽息子が金をせびりにくるたびに、気前よくやっていたのでは、かえって彼の独立を妨げるという議論に似ている。施しが彼の遊興費や生活費になってしまったのではたまらない。しかし施しが彼の更生資金になるような場合もあるのではないか。そのような場合の施しは有効ではないか。バウァーの指摘するような援助の有害性はたしかにみられるが、だからといって、すべての援助を有害だとするところまでは私は踏み切れない。そして低開発国の経済開発についての、政府の役割に対する評価が、私のほうがバウァーより高い。しかし、たとえば援助について、今日の世界で低開発国の援助要求すべてを拒絶することが不可能であることは、バウァー自身もよく知っており、それだからこそ、積極的に援助有害論を展開しているのかもしれない。総合開発計画、政府の役割についても、意図的に極端な反対論を展開しているのかもしれない。

以上私のコメントにも私なりのバイヤスがあろうが、この小著が、興味ぶかい多くの問題を含んでいることは察知されたと思う。訳文は正確で親切であり、とくに、キリスト教に無知なために多くの訳者がおかすような間違いから、本訳書は完全に免れていることを付記する。ただし五六頁六行目「インドの繊維品が」は「イギリスの企業が」に直していただきたい。（多磨書店・一九六八年刊・B6・一五九ページ・三八〇円）

田村秀夫著

『イギリス・ユートウピアの原型』

――トマス・モアとウィンスタンリ――

白井厚

カウツキーの書「トマス・モアとそのユートウピア」によれば、〃これまでに出されたモアの伝記のほとんどすべてには、故人をひたすら賛美する香煙が――人類の発展に寄与したと思われる人の業績を後世の人がたたえるためのそれではなく、カソリック教会がその信徒を盲目にしておくために、自派の聖者にささげる香煙が――少しばかり、いや、しばしば非常に多く、附着しているのである。〃

このような香煙は、先般封切られたフレッド・ジンネマンの映画「わが命つきるとも」（A Man for all Seasons, ポール・スコフィールド主演）にもただよっていたところだが、イギリス革命の研究者として著名な田村秀夫教授は、新著「イギリス・ユートウピアの原型」において、まずそのような香煙を、多くの資料と鋭い分析をもって吹き飛ばしてしまう。

周知のように、モアの「ユートウピア」には多くの対立する解釈が存在する。本書の整理に従えば、まずこれをルネサンス・ヒューマニストの作品として理解するシュテルンベルヒ、ルドハルト、ジェンキンスがあり、それを批判して、これは単に古代研究の産物ではなく資本主義から発生した近代的なコミュニズムであると解釈するカウツキー、エイムズがあり、それに対して、そこにおける中世的、カソリック的性格を強調するベア、チェムバーズ、ドナー、キャムブル、ブラレルがあり、また、左右のイデオロギー的解釈に反発しクリスチャン・ヒューマニストの作品という第三のパースペクティヴを主張するヘクスターの説もある。その中でも「ユートウピア」の社会制度における近代性を主張するカウツキー＝エイムズの系列と、中世的なものと理解するチェムバーズ＝ドナーの系列という対立が重要で、これは、「ユートウピア」自身の二重的性格に原因するのであり、〝中世と近代とを媒介するこのような過渡的な二重性をもつものとして「ユートウピア」を捉え、その歴史的社会的な性格を明らかにすることが、「ユートウピア」解釈の基本問題となるであろう。〟（七二ページ）

その場合田村氏は、〝モアが近代的に思考したのは、彼と商業資本との内的な結合に帰せられる〟というカウツキーの指摘に示唆を受け、モアの描いた理想社会が、当時のイギリス社会を理想化したものであり、とりわけ商業資本の拠点となった商業都市をモデルとしていることを明らかにすることから出発する。すなわち、ユートウピア島はロンドン市の繁栄であり、「ユートウピア」における民主的な選挙方法は中世末期のイギリス自由都市の自治方式が反映されたものであり、ユートウピア島の剰余たる輸出品目はまさしくイギリスのそれであり、〝ここにはロンドン市民の国民感情と、ハンザ商人を中心とする外国商業資本の力に抗して、次第に自己の主体性を確立しつつあったマーチャント・アドヴェンチュラーズを尖端とする、イギリス商業資本の自己主張がうかがえるであろう。〟（八三ページ）ユートウピア社会の制度的背景は、イギリスの都市と、それを基礎とする国民国家への発展であって、そのための職業的責任の観念、自治の経験、自発的連合の能力という三つの要件は、いずれもユートウピア社会に実現されていると主張されている。さらに、モア自身が富裕なロンドン商人の代表であり、ロンドン商人の国民意識とそれに伴うエリート意識は、ユートウピア人のエリート意識に対応し、植民地獲得戦争の正当化、贈物や報償金や傭兵の使用、戦勝による経済勢力の拡大など、〝イギリス商業資本のもつ一種の帝国主義的性格の反映〟と考えられる。こうして田村氏は、商業資本の進歩的性格を考えつつ、「ユートウピア」のカウツキー＝エイムズ的解釈の系列を理解しようとする。さらに、このような商業資本と絶対王政の結合は、ユートウピアの建設者としての征服王ユートパスの役割に反映し、前期的資本としての保守的性格は、カトリシズムとの妥協に表現され、また秩序と権威を尊重するロンドン商人の生活態度からもチェムバーズ＝ドナー的解釈を理解し、ルネサンス・ヒューマニズムの経済的基礎を商業資本に求め、それとカトリシズムの妥協形態としてクリスチャン・ヒューマニズムを理解するなら、ヘクスター的解釈も理解しうるとしている。（一〇六ページ）

こうして基本的な視角＝「商業資本を軸とする考察の方法」を設定することによって、確かに「ユートウピア」社会のさまざまな特徴は明確にその関連においてとらえられることとなるが、それでは「ユートウピア」の最も大きな特徴である貨幣と私有財産の否定、金持が貧乏人を収奪することに対する批判、虚飾に対する批判、共産主義の主張を、この視角からどのように説明しうるか？　田村氏によれば、〝モアの代表したマーチャント・アドヴェンチュラーズは、毛織物工業という国民的生産力を背景にもった商業資本として進歩的な側面をもつと同時に、なお前期的資本としての保守的な側面もあり、絶対王政成立期のイギリス商業資本がもつ歴史的矛盾が『ユートウピア』のコミュニズムとして反映していると考えるべきであろう。また、それを可能にしたのは、商業資本を経済的基礎とするヒューマニズムのもつ批判性と時代の地平を越える超越性であろう。〟（一〇七ページ）それでは私有財産批判やコミュニズムは前期的資本としての保守的な面なのか、歴史的矛盾がなぜコミュニズムに反映するのか、ブルジョア・ヒューマニズムがなぜ私有財産批判、共産主義に達しうるのか、なお疑問の余地が残る。田村氏はオウエンやサンーシモンのブルジョア性をその例証として挙げられるが、オウエンの共産主義の場合にはゴドウィンの強い影響があったのであって単なるブルジョア性だけからは理解されえないと思うし、進歩的なブルジョアジーのイデオローグであったサンーシモンには、私有財産の批判も富の平等や社会主義的な組織の提案もなかった。

※　拙稿「ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン」「三田学会雑誌」五八巻一、二号、五九巻一二号。

※　※

田村氏によれば、一六世紀のモアの「ユートウピア」がまさにユートウピア思想そのものの代表的な作品であるのに対し、一七世紀のウィンスタンリの「自由の法」は前世紀の末まで完全に忘れられた存在であったが、〝イギリス革命の精神を、その一層民衆的で革命的な形で体現している〟（M. L. Bernert）がゆえに、革命的な一七世紀のイギリス・ユートウピア思想の代表と考えられている。そして民衆との距離をメルクマールとして、「ユートウピア」は「外から」＝「上から」与えられたユートウピアであり、「自由の法」は、〝当時広汎に拡がっていた民衆的なセクトの宗教思想を母胎とし〟「内から」＝「下から」形成されたユートウピアとして類型論的に把

握される。前者は、ベイコン（「新アトランティス」）、ハートリブ（「マカリア王国」）、ハリントン（「オシアナ」）、の原型であり、後者は水平派の「タイラニポクリト」、「新発見の島オルビア」などの原型である。こうしてこの書の意図は、第一に〝これまで断片的にしか紹介されなかったウィンスタンリ関係の資料・文献を整理し、研究史的な展望を行なうとともに、これまでに発表した論文を一巻に纏めることによって、今後期待されるわが国におけるウィンスタンリ研究発展の出発点にしたい〟ことであり、第二には、民衆との距離を基準とした、「外から」＝「上から」と「内から」＝「下から」という〝ユートウピア思想におけるこのような二類型の「原型」を、ウィンスタンリとモアに見出し、著者の今後のユートウピア思想史研究の序論にする〟（あとがき）ことである。

田村氏は、イギリス革命におけるディガーズの運動を説明し、ウィンスタンリ解釈の系譜として、ウィンスタンリの近代性、合理性を強調し近代社会主義の歴史の中に位置づけようとするベルンシュタイン、グーチ、ヒル、ホロレンショー、ペティゴースキイ、ブレイルスフォドと、それに対してウィンスタンリをマルクスではなく、ヘンリ・ジョージの側へ引き寄せようとするデイヴッドスン、ビアレンズ、その神秘主義的側面を強調するジョーンズ、トレルチ、シェンク、サビーン、さらにこの両者を統一しようとするザゴリンなどにつき克明に解説を加える。ついでウィンスタンリの初期の神学上の著作からディガー運動のパンフレットを経て「自由の法」に至る連続的な発展をたどり、そこを一貫する彼の論理を〝神学的歴史観の成立〟として追求し、危機意識と社会批判、ディガー運動の実践が語られ、「自由の法」の性格が示される。

「自由の法」は、階級支配による束縛のない地上の楽園であって、ディガー運動の実践における敗北の経験から、議会、政府、警察、軍隊、裁判所などの権力機構があり、法の支配と刑罰が存在する。だがこれは国王の法律とは全く異なり、共同の平和を保存するための規則である。経済的には共産主義であり、監督官が生産の指導を行なう。その他議会や裁判所の機能などが具体的に説明され、そして田村氏によれば、〝このように、民衆から選挙された議会により、既存の支配体制を全面的に否定するという主張は、この理想社会を、いわば「下から」のユートウピアとして理解することを可能にする。それは、モアの「ユートウピア」が、ユートパス王により「上から」導入された理想社会の構想であったのと、対極的なユートウピアの類型といえよう。〟（二一七ページ）

さらにそこにおける反僧侶主義、土地と労働の管理、実業教育などに触れられ、こうしたウィンスタンリの思想は、〝中世の宗教的神秘主義から近代的合理的社会主義への移行〟（スウィージィ）、〝社会理論は完全にプロレタリアのイデオロギー〟（ペティゴースキイ）と理解するのは危険であるとして、ブルジョア的発展から取り残されたディガーズの、反封建・反資本主義という両面性からウィンスタンリの神秘主義と合理主義の融合を理解し、これを、古代の平和と自由、古い安定した農村共同体への郷愁をもった貧農の共同体思想として把握されている。〝貧労働の存在しない「自由なコモンウ

エルス」において、生産を指導するのは七年間の徒弟期間を経た家長たる親方（マスター）であり、その管理に当たる「監督官」のモデルはロンドンのギルド職員である。この共和国家において経済機構の分析が不十分であると指摘されることも、資本主義的な発展に適応しえない彼らの限界からの当然の帰結であろう。〟（二二六ページ）モアの「ユートウピア」が近代社会＝資本主義の生産力の発展に対して「前向き」に対応したのに対し、これは「後向き」の対応であるが、それは革命の一定の段階では革命を前進させる役割を果たしたと結論さ・れる。

〝ウィンスタンリ研究発展の出発点〟という本書の第一の意図は、田村氏の前著「イギリス革命思想史」（創文社、昭和三六年）と共に、美事に達成されたことを疑いえない。氏の広い文献渉猟と克明な研究によって、わが国のウィンスタンリ研究の水準は一段と高まったと考えられる。そこで第二の意図であるユートウピア思想の二類型化について、若干の疑点を述べて著者の教示を得たい。

まず第一に、「外から」＝「上から」のユートウピアと「内から」＝「下から」のユートウピアという類型化は、極めて興味深いし確かに必要な視点ではあるが、それのみで割り切るのはさまざまなユートウピアの社会思想としての複雑な性格をあまりに単純化してしまうのではないだろうか。たとえばモアとベイコンの関係について、田村氏はこれを直線的に結びつけているが（二〇ページ）、厳しい眼をもって社会の矛盾や国王の背徳を批判し犠牲となったモアと、狐官運動と汚職を重ね社会制度の批判を欠いたベイコンとでは、そのユートウピアの性格も役割もかなり異なる。モアが資本の本源的蓄積期における社会批判、全体としての共産主義という構想によってユートウピアの画期をもたらしたのに対し、ベイコンは社会批判を忘れて科学技術の発達を謳歌し、ユートウピアの近代化に貢献した。また田村氏はモアの民衆に対する不信や軽蔑の態度を強調される（一六ページ）が、当時の社会、大法官としての地位を考慮にいれた時、私はモアの民主主義、庶民信頼の思想※をむしろ高く評価したいと思う。モアの「ユートウピア」が「上から」の物語であることに間違いはないけれども、それがベイコンとは異なって後の「下から」のユートウピアに与えた大きな遺産こそが問題であろう。

次に、こうした二極分解法をとり、モアとウィンスタンリをその「原型」として置くと、その後のイギリスのユートウピア、たとえばヘイウッド、バークレー、スウイフト、ウォーレス、ゴドウィン、モリス、バッキンガム、ブルワー・リトン、ウェルズ、オーウェルなどはどのように位置づけられるのだろうか。大法官と貧農のように社会基盤が明確な場合はまだよいが、ユートウピアはしばしば中間的な立場の人によっても描かれるので、その後のユートウピア思想をこの二極分解法によってどのように処理するのか、その展望を示して欲しかった。

第三に、この書は「イギリス・ユートウピアの原型」という標題だが、イギリス・ユートウピアとは何なのか、他国のユートウピアとはどのような関連にあるのか、モアとウィンスタンリはイギリス・ユートウピアのみの原型であるのか、やはり疑問として残る。

一口にユートウピアといっても、〝たとえユートウピア共和国にあるものであっても、これをわれわれの国に移すとなると、ただ望むべくして期待できないものがたくさんあることを、ここにはっきりと告白しておかなければならない〟と書いたモアと、ディガーズのサリー州聖ジョージの丘で共有地の共同耕作という〝直接行動〟を実践しその経験のもとに「自由の法」を書いたウィンスタンリとは、「上から」「下から」というだけではなく、かなり性格が異なる。

※※ ユートウピアとは何なのか、たとえばレヴェラーズらの政治的急進主義、社会批判とはどうちがうのか、〝ユートウピア論〟そのものの展開を期待したいところである。

※ 田村氏はモアの「ユートウピア」は外からの同情であり民衆に対する不信を示すといわれる（一五ページ）が、モアの庶民依頼の思想に注目したい。たとえばヒスロディに次のように言わせている。〝多くの場合、貧乏人の方が金持などよりもいっそう幸福な生活を楽しむ権利があるのです。なぜかと申しますと金持は貪欲で陰険で非生産的でありますが、貧乏人は謙虚で純情で日々労働によって自分の利益そのものよりもむしろ全体の福祉に多大の貢献をしているからです」。（平井訳六二ページ）

※※ 急進主義の三原型については、拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」（未来社、一九六四年）七一ページ以下参照。

（中央大学出版部・一九六八年六月刊・A5・二六八ページ・九〇〇円）